

ネットワークアンケート ⑤8

糖尿病ネットワークを通して

医療スタッフに聞きました

Q. 腎症に対して、患者さんは不安を感じておられますか？

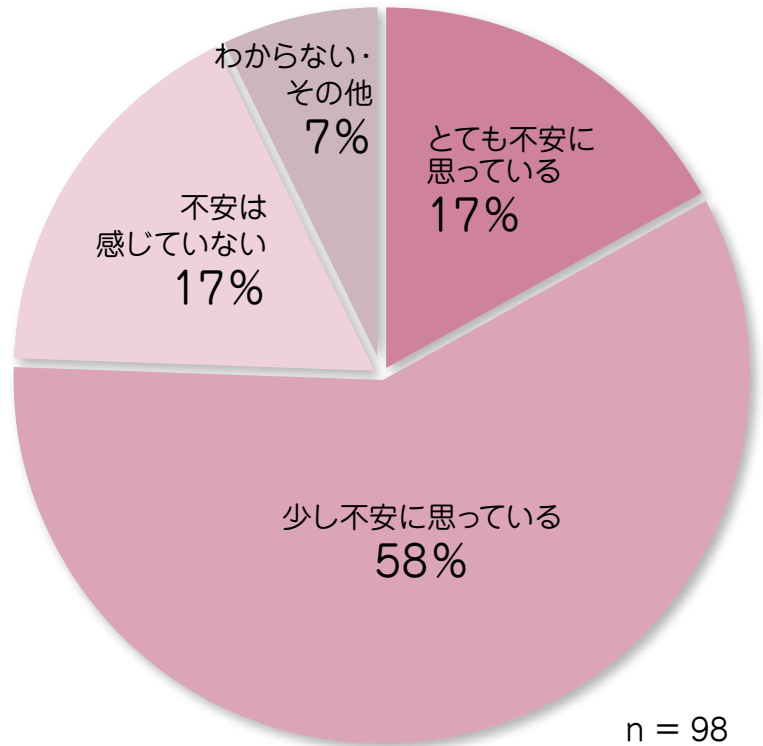
透析患者数が33万人を超え、中でも糖尿病性腎症(Diabetic Nephropathy: DN)は1998年以降、透析導入の原因疾患の1位です。患者さんのQOLはもちろん医療費の点からも、対策がますます急務となっています。そこで今回は「腎症の早期発見」をテーマに、検査体制についてや、糖尿病患者さんの病気への意識についてお話を伺いました。

[回答数：医療スタッフ98名(医師10名、看護師25名、管理栄養士33名、薬剤師18名、保健師7名、その他5名。うち糖尿病療養指導士27名、糖尿病認定看護師4名)、患者さんやその家族392名(病態：1型糖尿病136名、2型糖尿病230名、その他26名 罹病期間：5年以下 75名、6～9年49名、10～19年125名、20～29年70名、30年以上64名、その他9名)]

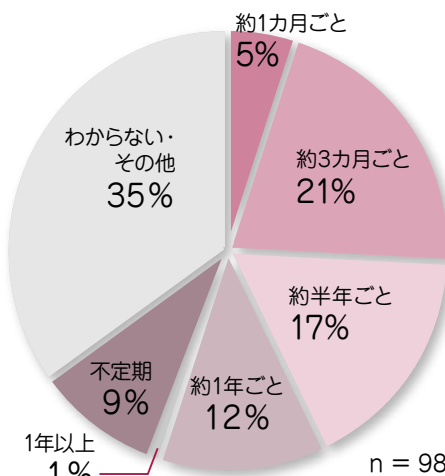
7割以上の医療スタッフが、患者さんは糖尿病性腎症(以下腎症)に対して不安を抱いていると回答。しかし患者さんのアンケート結果(右ページ)を見てみると、実際はもう少し多い8割の患者さんが不安だと回答しています。特に「とても不安に思っている」と答えた患者さんが3割以上と、医療スタッフの想定(2割弱)よりも多くいらっしゃいました。

腎症の多くは自覚症状に乏しいですが、尿検査・血液検査で診断ができます。今回の調査では、腎臓病でない患者さんに対して、半数以上の医療スタッフが、1年以内の間隔で尿アルブミン検査を実施していると回答しており、3カ月以内という人も1/4いました。

また尿検査の実施を検討する際に考慮する点として、血糖や血圧コントロール、血液検査の結果のほか、糖尿病の罹病期間を考慮すると回答した人が6割、循環器系疾患の既往歴や検査結果を考慮すると答えた人も3割以上と、腎症の早期発見のた



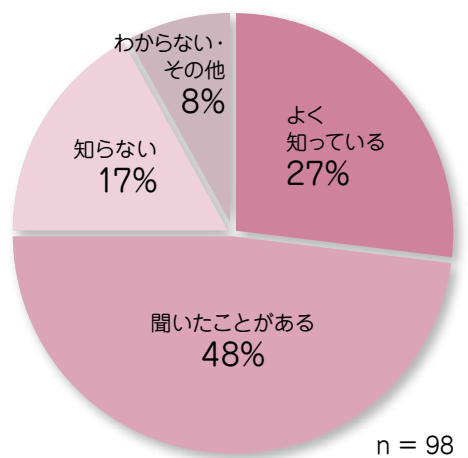
Q. 腎臓病ではない患者さんの場合、尿アルブミン検査を実施する頻度は平均でどれくらいですか？



めに様々な角度から検証されていることがうかがえました。

なお昨今、顕性アルブミン尿を伴わないまま腎機能が低下するケースがあることが

Q. アルブミン尿を伴わずに腎機能が低下するケースがあることをご存知ですか？



話題になっていますが、そのことについて75%の人が「よく知っている」「聞いたことがある」と回答した一方で、「知らない」という人が17%いました。